



# 華道で個性、感性を豊かに

—「Ikenobo 花の甲子園」全国大会で連覇をめざす

## 桐生高校茶華道部華道班一

桐生高校と桐生女子高校は2021年4月に統合し、新たに「桐生高校」としてスタートしました。最後に入学した桐生女子高校の生徒は今春に卒業したので、いま在籍する女子生徒は新生桐生高校になってから入学してきた生徒です。

桐生女子高校時代に「Ikenobo 花の甲子園」で全国制覇をし、さらに桐生高校となってからも昨年度全国優勝を果たした茶華道部華道班を、今回の「すなっぷ」で取材しました。

### 花材はソケイ、菊、アルストロメリア

6月19日（月）、夏を思わせるような暑さとなり、校内から出てくる女子生徒の中にはハンディ型の扇風機を片手に下校を急ぐ姿が見られました。かつて桐生女子高校に勤務したことがある筆者としてはセーラー服には懐かしい思いもありますが、男子生徒と一緒に校門を出ていく姿はごく自然で共学が定着した感がありました。

さて、顧問の益子千里先生の案内で活動場所の地学教室に入ると部員達の明るい挨拶が待っていました。3年生が引退して、現在部員は7名です。間もなく指導して頂く池坊の教授者西場小杜子（恵風）先生が

入室。すぐに活動が始まりました。

この日はソケイ、菊、アルストロメリアの3つが生け花の素材です。これらの花は西場先生が決めるのではなく、部費の600円という金額に合わせて生花店が届けてくるもので、当日を迎えないと何が届くのかは分からないということです。いわば、





業者の都合でその日の課題が決まると言うことで、予想外のことでした。

西場先生から机の上に広げられた花の説明があり、ソケイの花材について「太陽の日差しが上からくるのでその葉は上を向くように伸びていく、枝は自然に曲がったりして伸びていくのでそれを生かすことが大切」と早速ワンポイントアドバイスが出ました。

生徒達はまずソケイを手にして構想を練っています。真っ直ぐに伸びた花材を手で長短の工夫を試みる生徒や屈曲した枝の素材を生かそうと工夫する生徒。20分ほど構想の時間が静かに過ぎていきます。この間に西場先生から個人別に一言二言のアドバイスが入り、いよいよ生徒達は正面に据えた花器を前に、剣山にグッと刺していきます。真剣な眼差しが注がれています。

花材はそれぞれ3本ずつあり、特に赤い花をつけたアルストロメリアとの調和がキーポイントのように感じて見ていると、西場先生から「生け花は季節感を表すことが大事、花はたくさん活けるというものではない」「季節に合わせるということはいえ



ば、今は涼しそうに表現することも大事」  
「生け花はおもてなしの心が大切」と次々と大事な視点が指摘されました。同行の瀧口さんは「ついもったいないと思って活けたくなるね」と囁いていましたが、女子生徒の中に混じって活けている唯一の男性（再任用の同校教員）も同様なことを呟いていました。

約1時間が経ち、ほぼ出来上がってきました。やはりソケイの緑の葉と赤が強いアルストロメリアのバランスに皆さん苦心しているようです。そこに菊を入れるのか入れないのかこれも迷うところです。



## 部員たちにインタビュー

活けられた花器を前に、部員達にいくつか質問を投げかけました。

### 『華道部に入部したのはなぜ?』

部長の川島さん（2年生）

「日本文化に触れたかったからです。2学年上の先輩が成し遂げた花の甲子園が格好良かった」

副部長の関根さん（2年生）

「美術部と兼部していて、美術の造形や奥行を学べると思って」

田島さん（2年生）

「家が和のものが好きで、祖母が華道をしていたので」

斉藤さん（1年生）

「小学5年の時、華道クラブに所属していたこともあり、また新しい視点で学べるかなと思って。私も美術部と兼部」





やはり全国制覇という実績が与えた影響は大きく、入部の動機の一つになっているようです。

### 『生け花をしていて難しいと思う事や良いなと感じることは？』

川島さん

「活けるようになってから、日常生活の花を見る視点が変わりました。思った通りに活けられないことや、もっと出来たのではないかと思うこともあるし、人の活けているところを見て自分の中に取り入れてみようと思うこともあります」

関根さん

「枝に鋏を入れる時、一回切ったらもどせない。ここで切ったら失敗してしまうかとドキドキします」

筆者は書道の教員でしたが、生徒には「書は一回性」と言っていたので、関根さんの言葉には共感するものがあります。

活けた花は、校内のあちこちに飾ります。この前活けた百合はつぼみだったのが開い



てきて、先生がそっと香りをかいで下さっていたりして、うれしくなりますとのことでした。

### 『華道と普通の授業との違いは？』

川島さん

「学校の授業は同じことを勉強するけれど、華道は活ける人によって個性や感性がそれぞれにあり、そういったものを目指すもの」と、明解に答えてくれました。



実際、活けられた作品は、3種の花を活けたもの、2種の花で仕上げたもの、また、その数も様々です。天を突くようにソケイを真っ直ぐに立てた人、横に枝を伸ばし、曲がった枝の素材を生かした人、わずか60分ほどでしたが、空間や彩りを頭に描いていくことで各人の個性が表れてくるようです。

西場先生からも「花の素材の持ち味をどう生かすのか、生け花は正面を意識し、目線の高さなども重要」と話があり、生徒の作品を通してここでも重要な視点が指摘されました。

## 150校の参加校の頂点に

「Ikenobo 花の甲子園」は、池坊の指導を受けている全国の高校（150～160校）が参加し、先ず関東地区は北と南に分かれ、群馬は北関東の中で出場権を得なければなりません。それぞれの地区大会で出場権を得た8～9校の華道部が全国の頂点を目指します。3人一チームで一人10分ずつのリレー形式、30分間で一つの作品

を作り上げます。花材はその場で与えられますが、「持ち込み花材」も一つだけ許されます。（今年度の全国大会では持ち込み花材はなし）昨年度の大会テーマは「Flower of Life」。桐生高校の優勝作品は、「持ち込み花材」のニューサイランを用い、その他は指定花材（14種類）の中からバラとカスミ草を選んで仕上げました。

### （↓全国大会での制作風景）



さらに、制作後のプレゼンテーションでは、大会テーマ「Flower of Life」を「生命をくれる花」と解釈し、初代池坊専好の言葉を引きながら、生け花に向かう自分たちの心情を3分間で表現し、見事全国大会優勝を射止めました。

### （↓全国大会のプレゼンの様子）



顧問の益子先生からは「選手決めは大変。いわばみんな素人の中から選ぶけれど、花を活けるだけでなくプレゼンテーションもあり、桐生高校の生徒は、そこはしっかり出来るので、全員が全国を目標にしています」と話してくれました。

全国制覇をした先輩からは、「長時間立

ち続けるから体力も必要」「全国大会は緊張するけど、本番だと思わない、普段の練習だと思って臨もう」とのアドバイスがあったとのこと。

書に携わる筆者としては、構成や空間の美など共通することも多く、まだまだ生け花の魅力を探りたいところでした。素晴らしい作品を見せてくれた生徒さんに感謝し、高校生活でも大きな花を咲かせてくれることを期待したいと思います。

（文責：須田章七郎）



### \*取材後記

中学校の部活動をめぐっては、教員の働き方改革と併せて、地域移行を促す国の動きがあります。これに対して、指導者の確保や財源不足、地域格差、保護者の負担、選手の奪い合いなど解決すべき課題が次々と明らかになっています。

教育課程外にある部活動をどう扱うべきか、来春一本化される群馬県公立高校入試でも直面している問題であり、高校部活動の行方も非常に気になります。

多様な自己表現を保障する場としての部活動は、当事者である若者を交えてもっと議論される必要があります。

そんな中、「花を活ける人それぞれの個性や感性を目指す」との部長さんの言葉には、若者たちの部活動を何か別の目的に利用しようとする者の思惑とは一線を画し、清々しさと真摯な思いを感じました。

今回の取材を快く引き受けてくださった桐生高校の皆さまに、心より感謝申し上げます。

（取材：瀧口典子・須田章七郎・大山仁）